

厳密摂動論によるランダムボンド Heisenberg 模型の解析

Convergent expansion for the random bond Heisenberg model

○堀江宏太¹, 糸井千岳², 坂元啓紀³*Kota Horie¹, Chigak Itoi², Yoshinori Sakamoto³

Abstract: Energy eigenstates in the random bond quantum Heisenberg XYZ model in a d -dimensional finite cubic lattice are obtained for sufficiently weak XY exchange interactions. The Kirkwood-Thomas convergent expansion developed by Datta and Kennedy using the contraction mapping theorem for quantum spin states enables us to obtain energy eigenstates in the Edwards-Anderson model perturbed by sufficiently weak bond-dependent XY exchange interactions. We study energy spectrum and provide a sufficient condition on the perturbation for absence of level crossing between arbitrary energy eigenstates.

1. 導入

十分に弱い XY 交換相互作用を持つランダムボンド Heisenberg 模型に厳密摂動論を適用して解析する。

一辺の長さ L の d 次元超立方格子 $\Lambda_L = Z^d \cap (-L/2, L/2]^d$ 上のハミルトニアン演算子を Pauli 演算子 $\sigma_i^x, \sigma_i^y, \sigma_i^z$ と結合定数 (ϵ, \mathbf{J}) の関数として次のように定義する。

$$H_\Lambda(\sigma, \mathbf{h}, \mathbf{J}) = - \sum_{b \in B_\Lambda} (J_b \sigma_b^z + \epsilon_b^x \sigma_b^x + \epsilon_b^y \sigma_b^y). \quad (1)$$

ここで、最近接ボンドの集合 B_Λ は

$B_\Lambda = \{\{i, j\} | i, j \in \Lambda_L, |i - j| = 1\}$ である。また、 b を任意のボンドとして、ボンドスピン $\sigma_b^a = \sigma_i^a \sigma_j^a$ と定義する。スピン配位 $\sigma \in S_\Lambda := \{1, -1\}^{4L}$ の状態 $|\sigma\rangle$ を次のように定義する。

$$\sigma_i^z |\sigma\rangle = \sigma_i |\sigma\rangle.$$

\mathbb{Z}_2 対称性による、自明な二重縮退を取り除くため、

$$\sigma_{i_0} = 1 \quad (2)$$

を仮定する。部分格子 Λ'_L を Λ_L から i_0 を除いた集合と定義する。

2. 無摂動系

補題 1. 条件(2)のもとで d 次元超立方格子 Λ_L 上のハミ

ルトニアン(1)が無摂動 $\epsilon = \mathbf{0}$ の場合を考える。ほとんどすべての $\mathbf{J} = \mathbb{R}^{B_\Lambda}$ について任意の異なるスピン配位 $\sigma, \sigma' \in \{1, -1\}^{4L}$ で

$$H_\Lambda(\sigma, \mathbf{J}, \mathbf{0}) \neq H_\Lambda(\sigma', \mathbf{J}, \mathbf{0}), \quad (3)$$

が成り立つ。

補題 1 より無摂動の場合ほとんどすべての $\mathbf{J} = \mathbb{R}^{B_\Lambda}$ について縮退がないことがわかる。

3. 展開法

ハミルトニアンを次のようにユニタリー変換する。 $\tilde{H}_\Lambda = U^\dagger H_\Lambda U$

$$= - \sum_{b \in B_\Lambda} (J_b \sigma_b^x + \epsilon_b^x \sigma_b^z + \epsilon_b^y \sigma_b^y) \quad (4)$$

ここで、 $U \sigma_i^z U^\dagger = -\sigma_i^x$, $U \sigma_i^x U^\dagger = \sigma_i^z$.

任意の部分集合 $D \in S_\Lambda$ について状態 $|\pm\rangle$ を実関数 $g(X)$ により次のように表す。

$$|\pm\rangle = 2^{-(|\Lambda_L|+1)/2} \sum_{\sigma} \sigma_D (1 \pm \sigma_{\Lambda_L}) \psi_{\pm}(\sigma) |\sigma\rangle$$

$$\psi_{\pm}(\sigma) = \frac{1}{2} (1 \pm \sigma_{\Lambda_L}) \exp \left[-\frac{1}{2} \sum_{X \in S_\Lambda} g(X) \sigma_X \right]$$

ここで、 S_Λ を 2^{4L} から空集合を除いたものと定義する。また、 $\sigma_X := \prod_{i \in X} \sigma_i$ である。無摂動模型における \mathbb{Z}_2 対称性による二重縮退が摂動によって分裂するので、ス

ピン反転演算子 $P_Z = \sigma_{\Lambda_L}^Z$ を定義すると, $P_Z|\pm\rangle = \pm|\pm\rangle$ より $|\pm\rangle$ は P_Z の固有状態になっている. 固有値方程式

$$\tilde{H}_\Lambda(\sigma, \mathbf{h}, \mathbf{J})|\pm\rangle = E_\pm|\pm\rangle,$$

から E_\pm と $g(X)$ についての関係式が得られる.

$g(X)$ の関係式から $F(g) = g$ という不動点方程式を定義する. XY 相互作用の結合定数が十分に弱い十分に弱いとき, $F(g)$ が収縮写像であることを証明することができる. よって, 収縮写像の定理より $F(g) = g$ は一意な解をもつことを示せる.

定理 1. ハミルトニアン(6)で定義されるランダムボンド Heisenberg 模型について考える. 任意の部分格子 $D \in S_\Lambda$ について, XY 相互作用 ϵ が十分に弱いならば, エネルギー固有値 E_\pm をもつ固有状態 $|\pm\rangle$ が存在し, $P_Z|\pm\rangle = \pm|\pm\rangle$ を満たす.

また, エネルギーギャップ $|E_+ - E_-|$ は次のように指数関数的に小さくなる.

$$|E_+ - E_-| \leq A \sum_{b \in \partial X} J_b s_b^D \|g(X)\| (\epsilon M)^{|\Lambda_L|}$$

ここで, A は定数, M は $M > 0$ の定数, ϵ を

$$\epsilon := \sup_{c \in B_\Lambda} \sum_{b \in \partial X} |\epsilon_b^x - \epsilon_b^y s_b^D|$$

で定義するとき, $\epsilon M < 1$

である. よってこの定理によれば, 有限格子の模型では摂動によりエネルギー固有値の分裂が起こるが, 無限に大きな格子では縮退し, \mathbb{Z}_2 対称性の自発的な破れが予想される.

4. エネルギーギャップについての展開

二つの固有状態 $|C\rangle, |D\rangle$ のエネルギーギャップを評価するために $|\pm\rangle'$ を次のように表す.

$$|\pm\rangle' = 2^{-(|\Lambda_L|+1)/2} \sum_{\sigma} \sigma_D (1 \pm \sigma_{\Lambda_L}) \psi(\sigma) \phi(\sigma) |\sigma\rangle$$

$$\phi_{\pm}(\sigma) = \frac{1}{2} (1 \pm \sigma_{\Lambda_L}) \sum_{x \in S_\Lambda} f(x) \sigma_x$$

ここで, エネルギーギャップ Δ_Y を次のように定義する.

$$\Delta_Y := 2 \sum_{b \in \partial Y} J_b s_b^D.$$

ここで任意の $D \in S_{\Lambda_L}$ について

$s^D: \Lambda_L \rightarrow \{1, -1\}$ を $i \in D$ ならば $s^D = -1$ また,

$i \notin D$ ならば $s^D = 1$ と定義する. また,

$\partial X = \{\{i, j\} \in B_L | i \in X, j \notin X \text{ or } j \in X, i \notin X\}$ と定義する.

次に,

$$e_{\pm}(C) = E_C - E_D - \Delta_C,$$

$$e_{\pm}(Z) = \frac{f(Z) \pm f(Z^c)}{F(D) \pm F(D^c)}$$

と定義する. $|\pm\rangle', |\pm\rangle$ のエネルギー固有値方程式から $e_{\pm}(C), e_{\pm}(Z)$ についての関係式が得られる. その関係式から不動点方程式 $e_{\pm}(C) = F(e)(C)$ と $e_{\pm}(Z) = F(e)(Z)$ が得られ, $F(e)(C)$ と $F(e)(Z)$ は収縮写像であることが示せる.

定理 2. ハミルトニアン(1)で定義されるランダムボンド Heisenberg 模型について考える. XY 相互作用 ϵ が十分に弱いならば, 結合定数 (ϵ, \mathbf{J}) に依存する十分に小さい定数 $\delta > 0$ が存在して, 二つの異なる部分格子 $C, D \in S_\Lambda$ の摂動を加えた模型のエネルギーギャップ $E_D - E_C$ に関して次の不等式が成り立つ.

$$H_\Lambda(s^C, \mathbf{J}, \mathbf{0}) - H_\Lambda(s^D, \mathbf{J}, \mathbf{0}) - \delta < E_D - E_C$$

$$< H_\Lambda(s^C, \mathbf{J}, \mathbf{0}) - H_\Lambda(s^D, \mathbf{J}, \mathbf{0}) + \delta$$

よって, 任意の状態 $|\pm\rangle, |\pm\rangle'$ は XY 相互作用が十分に弱いならばエネルギー準位の交差を起こさない.

参考文献

- [1] Datta, N., Kennedy, T., Expansions for one quasiparticle states in spin 1/2 systems J. Stat. Phys. 108,373-399(2002)
- [2] Datta, N., Kennedy, T., Instability of interfaces in the antiferromagnetic XXZ chain at zero temperature Commun. Math. Phys. 236, 477-511 (2003)
- [3] Edwards, S., F., Anderson, P. W. : Theory of spin glasses J. Phys. F: Metal Phys. 5, 965-974(1975)
- [4] Kirkwood, J. R., Thomas, L. E., :Expansions and Phase Transitions for the Ground State of Quantum Ising Lattice Systems, Commun. Math. Phys. 88, 569-580 (1983)